

第42回「全日本中学生水の作文コンクール」
宮城県地方審査会優秀作品集

『水』について考える

宮 城 県

はじめに

水は命の源です。水は、私たち人間だけでなく地球上のあらゆる生物にとって欠くことのできない貴重な資源です。また、使えばなくなってしまう石油などの化石燃料とは異なり、太陽の恵みによって太古の昔から変わらずに地球上を循環している資源でもあります。

このような循環を通じて、水は私たちの日常生活や社会活動、あるいは自然環境や生態系を支える貴重な役割を果たしています。加えて、最近では、水源や流域における水質の保全、水辺環境の保全と創出、おいしい水への志向など水資源に対する国民のニーズも多様化しています。

一方で、我が国は比較的降水量に恵まれているとはいえ、地形は急峻で平地が狭いため、一人ひとりが利用できる水の量は決して豊富とはいえません。近年、全国のいたるところで渇水が発生し、私たちの社会生活に大きな影響を与えています。

このような状況の中、水循環基本法では、8月1日を「水の日」と定めており、この日を初日とする1週間は、「水の週間」として、国や県が、水の貴重さや水資源開発の重要性などについての理解を深めるための様々な啓発活動を行っています。

「全日本中学生水の作文コンクール」は、こうした啓発活動の一環として、昭和54年から行われており、日常生活での体験や、御家族、先生方から学び聞いた話などに基づいて作文を書くことで、次代を担う中学生の皆さんに、水について考える機会を持っていただくことを目的としたものです。

県内の中学生から応募いただいた作文は、宮城県地方審査会を経て、中央審査会へ推薦しています。今回は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、5月末まで県内中学校が臨時休業となる例年にない状況の中、多くの作品が寄せられました。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災の体験を踏まえた内容の作文が多く寄せられたほか、日々の身近な体験や発見から生まれた「水を大切に作る心」が率直に綴られた作文もありました。これら作文の中から、今回の宮城県地方審査会における優秀作品を御紹介します。ぜひお読みいただき、皆さんが「水を大切に作る心」をいつまでも持ち続けるとともに、一人でも多くの方々にその心を広めていただくようお願いします。

令和2年11月

宮城県環境生活部環境対策課

も く じ

●優 秀 賞（3編）

- | | | | |
|----------------------------------|------------|-------------|---|
| ・水ストレスへの意識
【中央審査会 佳作】 | 仙台市立郡山中学校 | 伊藤 路 …………… | 1 |
| ・水を守る～野蒜の地から学んだこと～
【中央審査会 入選】 | 仙台市立郡山中学校 | 大柿 楽々 …………… | 2 |
| ・水と共に生きる
【中央審査会 入選】 | 宮城県仙台二華中学校 | 西原 結花 …………… | 3 |

●入 選（3編）

- | | | | |
|------------|------------|-------------|---|
| ・私達のくらしと水 | 仙台市立郡山中学校 | 尾崎 結 …………… | 4 |
| ・人間と環境と水 | 登米市立米山中学校 | 古関 楓 …………… | 5 |
| ・雪解け水から考える | 仙台市立南吉成中学校 | 堀内夕太郎 …………… | 6 |

●環境生活部長賞（4編）

- | | | | |
|------------|-----------|-------------|----|
| ・安全な水に感謝して | 登米市立米山中学校 | 浅田陽々葵 …………… | 7 |
| ・共に生きる | 登米市立米山中学校 | 服部 愛 …………… | 8 |
| ・街を育む水の流れ | 仙台市立第一中学校 | 三浦 叡 …………… | 9 |
| ・旅する水 | 仙台市立郡山中学校 | 水沼 舞桜 …………… | 10 |

（同一賞内は五十音順で掲載しています。）

●第42回「全日本中学生水の作文コンクール」募集概要 …………… 11

●「全日本中学生水の作文コンクール」中央審査会における本県のこれまでの入賞者 …………… 13

【優秀賞】

水ストレスへの意識

仙台市立郡山中学校

三年 伊藤 藤路

「水ストレス」。この言葉を初めて聞いたとき、私は実感がわかなかった。水ストレスとは、日常生活を送るのに不便を感じるほど水が足りない状態のことだそう。私たちの住んでいる国、日本は水道が完備されている。そのため、蛇口をひねればいつでも飲料水が出てくる。そんな恵まれた国で生活しているから、水ストレスという言葉に実感を持てなかったのだ。だが、決して日本と水ストレスは無関係ではない。

現在、この世界では水不足に悩まされている人が、世界人口の四十パーセント以上いる。そしてそれは、今後も上昇すると考えられている。この状況が続いてしまえば、二〇五〇年には世界人口の約半数が水不足にさらされる。その時世界人口は約九十七億人にもなると予測されているのだ。そう、水ストレスとは日本も含めた世界的な問題だ。

このことを知った私は、今までの生活を振り返ってみた。コップに飲み物を残したまま家を出て学校に向かう。お風呂では、無駄にシャワーを出し続けたりした。きれいな水があることをあたりまえだと思っていた。こんな生活をしている人は、私の他にもたくさんいるだろう。私たちは、水との関わり方にもっと危機感を持った方が良いのかもしれない。

私は、水不足の原因にこそ、この問題の打解策があるのではないかと考えた。水不足の原因で主に取り上げられるのは、「世界人口の増加」と「気候変動」だ。気候変動については、今もニュースで取り上げられている。地球温暖化や砂漠化、大雨、水害などが直接的な原因になっているだろう。地球温暖化の防止は水不足の防止にもつながる。生活の中で改善すべきところはまだまだ多くあるということだ。そして世界人口の増加につ

て。一見、どうしようもないことのように思える。人々の生活が豊かになれば、人口が増えることも必然だ。だが、ここで大事なものは、人口が増えるのと知っている状況で、一人一人がどのように水と関わっていくのかだろう。私たちの生活の仕方によって、この世界の未来も変わっていくかもしれない。「水は大切だ。無駄にしているといけない。」言葉では分かっている、本当に意味を理解し、実際に心がけて生活できている人はどのくらいいるのだろうか。

ある地域での取り組みを、一つ挙げたいと思う。香川県高松市は、昔から年間降水量が平均の三分の二程度の少雨地域である。また、周辺に大きな川がないためダムが作れず、吉野川から導水した水に依存していた。そのため、水はどんどん不足していった。その現状を変えようと、地域の人たちは「水を大切にす意識」を向上させるために取り組んだのだ。まず、「ため池守り隊」というボランティアが早明浦ダム周辺の清掃を行った。そして、「みずのわ」という親子向けの生き水体験などができるイベントを開催した。このようにして、地域の人々が呼びかけたおかげで市の節水意識は高まり、水道使用量が減少したのだ。

この話は高松市の中での話だが、日本の未来にも関わる大事な話だ。自分たちが意識したところで何も変わらない。そう思う人もいるかもしれない。だが、高松市の人々は地域を守るために呼びかけ続けた。そういった小さな行動が実を結んだ。今、この地球は水ストレスに悩まされている。地球を守るのは私たちだけだ。小さなことでも、多くの人が少しずつ水との関わり方を考え、意識を変えていけたらと、私は思う。

【優秀賞】

水を守るゝ野蒜の地から学んだことゝ

仙台市立郡山中学校
三年 大柿 楽々

たった一度、水なんて嫌い、そう思ったことがあります。

昨年夏、所属している劇団の合宿がありました。行き先は東松島。東日本大震災で津波の大きな被害を受けた地です。

月浜の海でめいっぱい遊んだ後に、旧野蒜駅を訪れました。旧野蒜駅とは、元々は奥松島・野蒜海岸の観光開発のために設置されていましたが、津波の被害を受けて使用不能となり、現在は形はそのまま震災復興伝承館として残っているものです。八年の時を経てめぐにやりと曲がったままでの手すりに看板。雑草に埋もれたままの旧線路。あまりにも寂しい光景を目にしてから、中へ入りました。一番に目に止まったのは、高い天井の近くにある、一本の横に引かれた線です。三・七メートル、と標記もあります。まさか、と思いましたが、それはすぐ向こうにある川の、当時の津波の高さでした。この地の沢山のものをさらったのは津波なのだと、紛れもない水なのだと、その頃にやっと実感が湧いたかもしれません。

その後には、伝承館のむかいにある震災復興祈念公園に行きました。ここには、この地野蒜の犠牲者全員の名前が彫られた石像があります。のべ六〇〇人。細かく彫られた名前を見て、涙が止まらなくなりました。水は東松島の美しい景色だけでなく、誰かの大切な人たちまで、何もかもさらっていつてしまったのです。

落ちつこうと、水筒を取り出しました。幼い頃からスポーツドリンクやお茶が苦手な私が水筒に入れるのは、水に限ります。冷たい水を一口飲んでぱっとしました。たった今心の底から憎たらしいと思った水を、私は常日頃そばに置いていたのです。思い返せば昨日も、この地を襲った月浜の

海が好きでした。夜のバーベキューでこの地の水をふんだんに使っていたご飯は、絶品でした。それだけではありません。私たちの生活は、水ありきのものなのです。

水に対して少し複雑な思いを抱きながら、合宿を終えた私は水の怖さについて調べることにしました。野蒜で見た光景以外にも、水が犠牲にしたものを知っておきたいと思ったからです。

平成三十年に全国で発生した水難は一三五六件、被害にあった人の数は一五二九人。うち六二九人が亡くなったたり行方不明となったりしています。他の事故と比べても、水難はいったん起きてしまうと命にかかわる重大事故になってしまふのです。調べ進めると、水難の起きる場所と場面が分かりました。いちばん多いのは全体の五三・六パーセント。過半数をこえて海でした。魚釣りや水遊びの場面が圧倒的に多いとも分かりました。

ほとんどの件が、個人の不注意や判断の誤りが原因だったと知り、悲しくなりました。

しかし、この現実から目をそむけてはなりません。このように私たちの手によって水を敵にしたいとは思いません。東松島の姿が変わり果てたのは、確かに水のせいかもしれませんが。水を嫌いだと思うのも、仕方ないのかもしれません。そこでも忘れていけない事実というのが、たった一つあります。それは、私たちはこれからも水と共に生き続けていくということです。ならば私たちは水を好きになるべきだと思うのです。

防げることは、防ぎましょう。共に生きる水には、感謝の気持ちを忘れずに。私たちが守っていきましょう。

【優秀賞】

水と共に生きる

宮城県仙台二華中学校

二年 西原結花

辺りを見渡すと一面に広がるヨシ。ここは石巻市にある北上川下流域の河川敷。中学二年生の初夏、私はヨシの移植を体験した。

ヨシとは、北海道から沖縄までの日本全国の湖沼や河川の水辺に大群落をつくる大型の抽水生物である。イネやムギに似ているがその大きさは4m近くまでなることもある。実際に見たヨシは大きく空に伸び、私の背丈を優に超していることに驚いた。

北上川下流域は、東日本大震災をきっかけに大きく変わってしまった。以前は琵琶湖の湖畔と並ぶ国内最大級の群生地だったが、津波で多くが流され、それによってそこに生きる生物も影響を受けた。チゴガニやアシハラガニ、クロベンケイガニなどの底生生物が見られなくなったり、地盤沈下による河川の塩分濃度上昇によって国内有数の産地だったヤマトシジミも絶滅の危機に瀕したりした。

ヨシについて調べるうち、私はヨシが担ってきた多くの役割を知った。その中で最も注目したのは、水をきれいにすることはたまただだった。それは水中の赤潮、アオコの発生に繋がる窒素やリンを養分として吸い取ること、土の中やヨシの水中の茎についている微生物によって水の汚れを分解すること、さらに水の流れを弱くし、水の汚れを沈めることだ。わずか3㎡のヨシ原で人間一人分の一日の汚水を浄化してしまうそうだ。まさにヨシ群落そのものが自然の浄化槽といえる。

水の浄化にはたくさんさんの労力がかかる。きれいな水を飲めるのは当たり前なことではないかもしれない。私の叔母が暮らすカナダへ行った時のことだ。水道の水を飲もうとすると、ミネラルウォーターを買うよう勧めら

れた。先進国のカナダでさえ水道の水が飲めないことに驚いた。しかし日本以外の国で水道の水が飲めないのはめずらしいことではないようだ。世界には、水道自体が無い国も多い。水が身近にないために水くみのために一日何時間も費やし正当な教育の権利を奪われている人もいるそうだ。世界の約九人に一人が自宅から往復三十分以内で水くみができないという。日本の豊かな水資源を、当たり前だと思っただけいけないのだ。

水をめぐって困っている人たちが世界にはたくさんいる。どうすればよいか。私はこう考えた。地球上の九十七%以上を占める海水の利用だ。先日私が見たテレビ番組で、海水を工夫することで飲み水に変えているのを見て、これを利用できないかと考えた。調べてみると、もう既にその技術をもつ会社があることが分かった。それは逆浸透膜というフィルターシステムを使って不純物を含んだ水に圧力をかけ純水をつくる方法だ。一般的な浄水器とは不純物の浄化能力に違いがあるようだ。日本の技術は水問題を解決する希望の光だ。

もう一つ忘れてならないことがある。それは、これまで私たちに恩恵をもたらしてくれた自然を守っていくことだ。北上川のヨシ原は震災によって変わってしまったが、移植が続けられ、少しずつ元の風景に戻ってきている。しかしながら、ヨシを守る人々の高齢化が進んでいること、ヨシの価値や機能が広く認知されていないことは今後の課題だ。

私は今回、数株のヨシをわずかな時間で移植したに過ぎない。何か変わったかと聞かれれば、その変化は本当にわずかなものかもしれない。けれど、一本のヨシから、いろいろな視点で物事を考えることができた。日本が豊かな自然に恵まれ、その自然に育まれた水と共に生きているということ。そしてこれからも水をめぐる問題とは付き合っていくかなければならないということ。全ての人が暮らしやすい世界になるように、未来を背負う若者としてこれからも考えていかなければならない。北上川はやがて海へと続く。海でつながった世界を私は見つけていきたい。

【入選】

私達のくらしと水

仙台市立郡山中学校

二年 尾崎 結

広い湖と、湖と複雑に入り組んだ山々。天気よかったこの日、湖はキラキラと輝いていた。「わあ…」想像していたよりもずっと大きい湖に、私は驚いて声をあげた。ここ、田子倉湖は田子倉ダムのダム湖だ。

私が訪れた田子倉湖は福島県の只見町にある。私はここを、学校の野外活動で訪れた。民泊先の方達のグループを只見町の様々な場所に連れて行ってくださった。その中の一つで田子倉ダムを見学した。ダムの方に特別に展望台に登らせていただき、そこで見た景色に私は圧倒されたのだ。

この田子倉発電所は一九六一年十一月に当時日本一の出力を誇る発電所として全台運転を開始した。現在は二〇〇四年から二〇一二年五月までの八年をかけて発電機の更新工事が行われ、日本の一般水力として二番目の出力を誇る水力発電所となった。そんな田子倉発電所のダム、田子倉ダムは、高さ四百四十五メートル、長さ四百六十二メートルのダムで、約五億立方メートルの水を貯える田子倉湖はダム湖百選にも選ばれている。

田子倉発電所の他に、只見町には原生的で巨木の密度が高い貴重なブナ林がある。ブナと川のミュージアムというところを訪れ、このブナ林や只見町をとりまく自然について学んだ。ブナ林や動物、溪流などの自然が再現されていて、ここで改めて水は豊かな自然になくてはならないものなのだと思った。

しかし、私はこのミュージアムでもう一つのことを知った。田子倉ダムに沈んだ集落があるということだ。集落は田子倉集落といい、只見川の最も奥まった場所に位置していた。冬には最大積雪深四、五メートルを超え

る厳しい自然環境にあったが、山菜や獣などの天然資源に恵まれ、比較的豊かな生活が営まれていたという。昭和三十四年、田子倉集落は戦後復興のために首都圏への電力供給を目的とする田子倉ダムの建設により、湖の底へ沈んだ。当時、田子倉集落に住んでいた人々はやむなく故郷から離れることとなった。

田子倉ダムの建設で突然消えてしまった生活や文化。それらに対する集落の人々の思いはきつととても大きかっただろう。私は改めて田子倉湖はたくさんの方があつた場所だったのだと気付いた。

野外活動は二泊三日で行われたが、私はその中で今までにないほどたくさんのお話を学び、水と私達のくらしについて考えるきっかけとなった。そして、改めて私達人間だけでなく生き物全ては水に生かされていると思った。只見町のブナ林も、そこに住む生き物も水があるから生きていられる。活動の一つで行った田植えでも田んぼにはたくさんの方が使われている。水があるから植えた稲は実をつけて私達の食べ物になる。また、田子倉発電所では水の力を利用して私達の生活に欠かせない電気を作る。そして、発電所を作るために故郷をなくした人々がいる。野外活動を通じて知ったことや感じたことから私は、私達は水に生かされていて、それは当たり前なことではないんだと思った。このことをふまえて私は、今の生活ができることを当たり前だと思わず、今まで以上に水を大切にしてくらしていきたい。

【入選】

人間と環境と水

登米市立米山中学校

三年 古関楓

わたしたちは毎日、お風呂、トイレ、洗濯、水分補給などをするために、当たり前のように水を使っています。そんな当たり前だからこそ、よく考えていくべきだと思います。では、水について考えていきましょう。

国や地域、ライフスタイルによって大きな差がありますが、平均すると一人一日あたり約百八十六リットルの水を使用するそうです。正直、とても驚きました。一人がそのくらいだと十人で千八百六十リットル。想像がつかみません。これをさらに世界中、と考えるとものすごく恐ろしいです。

そこでわたしは、どのようにしたら節水することができるか、自分なりによく考えました。一つ目は、歯磨きや顔を洗っているとき、水を出しっぱなしにしないこと。二つ目は、洗濯物を多く出さないことです。この二つは小さい子供から大人まで、だれでもできるのではないのでしょうか。

次に取り上げるのが、日本人は水を使いすぎている問題についてです。日本とケニアを比較します。日本人が一人一日に約百八十六リットル使用するのに対し、ケニアは約十四リットルだそうです。日本は水道設備が整っている環境にあるため、ついつい何も考えずに使用してしまうのではないかと思います。一方、ケニアは、毎日水をくみに行かないと水が得られない地域など、水のアクセスの厳しい環境もあるため、こんなにも少ないそうです。どれほど日本が他国と比べて裕福なのか、思い知らされました。

次に、水道水をつくるためにいくらお金がかかるかという疑問についてです。水道水を一立方メートル、湯船約五杯分をつくるのに百九十五円かかるそうです。十一パーセントが職員への給料、三十五パーセントが施設

の更新などにとっておくお金、四パーセントが施設を建てるための借入金の利息、四十七パーセントが水をつくり、送り届けるためのお金だそうです。消費者のわたしたちも、つく르는ことは関係ないといって無知であるのではなく、きちんと理解した上で、使っていかなければならないのだと実感しました。

次に、地球温暖化と水についてです。例えば、四度気温が上がったとき、年平均降水量はどうなるのかについて、温暖化すると海水温が上昇して大気中の水蒸気も増えることで蒸発する水蒸気量が増加するそうです。水蒸気量の増加は降水量の増加をもたらす一方、亜熱帯では水蒸気が上昇して雲粒雨粒になるときに凝結熱によって風向が変化するため、降水量が少なくなるそうです。このように、メリットやデメリットもたくさん出てきます。ある程度水がないと、水分補給の際や、生活するのに不便にしかならないと思いました。

自分なりに水について調べ、世界中で水についての問題があるということに気付き、節水することの大切さ、水を使えるということは当たり前ではないということが分かりました。何も考えず、思うがままに水を使用するのではなく、無駄にしているか、本当に使うべきなのか、よく考えて、常に節水を心がけると、よりよい環境を作る第一歩なのではないかと思えました。わたしは、よく料理をするのですが、洗い物をする際に今回学んだことを胸に刻んで、行動します。水を無駄なく使うための方法を実践し、世界の環境を大切にしていきたいと思います。

【入選】

雪解け水から考える

仙台市立南吉成中学校

一年 堀内夕太郎

「水」それは日々ぼくらの生活になくはならないものだ。しかし蛇口をひねれば出てくる水の大切さを、東日本大震災が起きるまで両親は気付かなかった。三・一一、ぼく達は水のありがたさを改めて知った。ガス、電気、水道全てが止まった。不安で揺れる両親の心を、さらにおおるような冷たい雪がこれでもかと空から降ってきた。スキーウェアを着せられた幼いぼくは無邪気に雪を喜んでいたそう。いつもの祖父母がやってきて家が賑やかだったのを今でも覚えている。その雪解け水を父は家中の衣装ケースにため込んだ。貯めた雪解け水は六人になった一家のトイレに全て使ったそう。それでも生活水は足りず、父は二時間ほどかけ、まだ水が出ている場所から毎日仕事帰りに自転車運んでくれていた。あれから九年が過ぎた。

「コロナも心配だけど、雪解け水が足りないから農業も大打撃かも。」

父が新聞を見ながらつぶやいた。それを聞いたぼくは雪不足の影響について調べることにした。本来ならば、寒い冬が終わると、雪は形を変えて大地を潤す。例年は白く輝く泉ヶ岳が、山頂に白い帽子をかぶっただけで春を迎えてしまった。岩手のスキー場で働く人も

「この時期アスファルトが見えるなんてことは今までなかった。」

といていた。実際、ぼくたちがその話を聞いたのは三月だったが、岩手の山には雪ではなく雨が降っていた。このまま温暖化が進み、山に雪が降らなかつたらどうなるだろう。冬に降るのが雪ではなく雨になってしまつたら、山にとどまることなくそのまま川に流れ出てしまえば春に代掻きや田植えに必要な雪解け水が足りなくなってしまう。では春にたくさん雨が降

ればよいのではないかとも思うが、一度にまたたくさんの雨が降れば、土砂災害が心配だ。去年の台風は、各地でたくさんの被害をもたらした。

水はさらさら輝いて美しいだけでなく、色や形を変えてすべてを飲み込んでしまうケダモノにもなる。災害が次々おそう日本で生活するために、一人一人が防災意識を高めていかなければならない。いつ何が起るか分からないし、天災は本当に忘れたころにやってくる。ぼくたちにできることは、過去を知りそれを未来に生かすことだ。我が家には、水と食料が一定量必ず備蓄されている。春になれば山に入り山菜を取るのが恒例行事だ。タラの芽やコシアブラは天ぷらやおひたしで食べる。海には魚を釣りに行き、妹は小学一年生の頃から捌き方を教えられていた。祖父の畑で採れた野菜のおかげで、母は野菜をほとんど買わずに過ごしている。海と山、地球に感謝せずにはいられない。ぼくたちは地球と共に生きているのだ。しかし地球の怒りとも思える数々の災害に、戸惑ってしまう。戸惑っているのは人間だけではないようだ。雪が降らず暖かい冬に眠ることができない熊が東北地方のあちらこちらで目撃された。寝る場所を探しているのだろうか、寒い冬をさがしているのだろうか、すぐそばにいる野生動物との境界線が見えなくなっている。水の惑星「地球」を大切にしなければ、人間だけではなく、地球上に住む動植物全てに影響が出てしまう。

ぼくに何ができるのだろうか。SDGsは達成できるのだろうか。どうせ無理だろうと思つたら何も始まらない。小さな心掛けが海や大地を守り、地球を守ることになる。地球を守ることは、ぼくたちの生活を守ることになるのだ。蛇口をひねれば出てくる水、大地を、生物を潤してくれる水。与えてばかりの地球に、今度はぼくたちがおんがえしをしていかなければいけない。

【環境生活部長賞】

安全な水に感謝して

登米市立米山中学校
二年 浅田陽々葵

人間にも、動物にも、魚にも、自然にも、生きるために欠かせない水。私にとっては身近なものに感じるけれど、そう感じるのには一部の間人だけかもしれないと思います。

私は以前、ユニセフのCMを目にしました。エチオピアに住むある少女は、暑い暑い砂漠で水を得るためだけに、一日八時間もの時間を費やすといます。けれど、どんなに苦労しても得られるのは茶色く濁った水。彼女たちが生きていくには、その水さえ飲むことを強いられると思うと、心が痛くなります。日本では、蛇口を回せばすぐにきれいな水が出てくるので、私たちの当たり前と感じているものと水不足に困る人たちの当たり前の生活との大きな違いに驚きました。

では、水が豊富な地域とそうでない国の違いはなんなのでしょう。私は、二つのことに着目して考えてみました。一つめに着目して考えたことは、自然の中の水の循環です。私たちがよく購入するペットボトルに入っているようなミネラルウォーターは、地下水からくみ上げられているそうです。地下水は、初め海などから蒸発して上空で雲になり、雨や雪となって地上に降ってきます。その後、土の中にしみこんで、砂や岩などでゆっくり過されていったものです。地下水は、きれいにして飲む以外にも、川や海に流れこんでいって、またそれがくり返されていきます。日本は周りが海に囲まれ、山地もたくさんあるため、水がうまく循環できて、水不足になることがあまりないのだらうと考えました。次に着目したことは、浄水設備についてです。私の弟は今小学生で、工作や実験が好きでよく色々なものを作っています。以前は浄水場見学に行った事をきっかけにペット

ボトルで浄水装置を作ったのですが、うまくいかなかったようでした。それを見ていて、日本の浄水技術のレベルの高さに、改めてすごいなあと思いました。日本では、この浄水設備が全国的に広く整備されているため、きれいで透明な水が、ほとんど全部の地域で安心して使えるのだらうと考えました。この二つから、水の豊富な地域とそうでない地域の違いは、水の循環と浄水設備の技術の発達に差があるからなのではないかと考えることができました。

日本では、きれいで安全な水が使えて、本当に素晴らしい国なのだと思います。でも、そんな国だからこそ、大きな災害があった時は、水も思うように手に入らない大変さも経験しました。だから、水の無駄づかいは絶対にしてはいけないと思いました。私も、お風呂そうじをする時に、泡を使う量を減らして洗い流すための水量をできるだけ少なくしたり、手を洗う時に水を出しっぱなしにしないようにしています。中学生の私にできる節水はこのくらいですが、それで毎日心がければ、一ヶ月後、さらに一年後にはかなりの水を節約できると思います。これからも、水を大切に使用していきたいです。

【環境生活部長賞】

共に生きる

登米市立米山中学校
三年 服部 愛

地球上をめぐる水は、人々にとって身近な存在です。私達は、生活のほか、農業、工業など多くの場面で利用しています。その一方で、時には洪水や水不足の被害に見舞われることもあります。

水の恵みを利用し、災害を防ぐために昔から現在まで、人々は水の力を利用して、支えられるまで、さまざまな努力をしてきたと思います。私達は水に支えられ、水はめぐってくれる、自然の力、共に生きていると感じる毎日です。

あなたにとって、水はどんなものですか？日本人は、きれいな水、おいしい水が身近な存在でめぐまれていると思います。あたり前のように使っている水は、世界中の人で水不足など、水を使えない環境で育って貧しい生活で困っている人もいます。

私達は、水を大切に使う、無駄使いをしないといった、自分の水の使い方を考えるのもいいと思います。水は生命の源で、水の安全性に感謝していきます。

町のいたる所で目にすることができるとは、生活していくためには、かかせないものです。水は、衣食住の全ての生活に必要です。衣は洗濯、食は、料理、住は、農業と幅広く使っています。私は、水を無駄にしないように生活しています。例えば、植物に水をあげる時、雨水をため、ためたものを使っています。自然の水も効率良く使い、雨水を無駄なく活用していきます。

世界中の人が水を使うのにも限りがあり、水は無限ではありません。私達の生活に水が届くまで、いろんな作業があります。安全な水が私達に届

くと、皆が笑顔になります。私が初めて水を見た時、さわった時、「すごい」

と、思ったと思います。水は、透明できれい、おいしい。さらさらしている水のすごさが伝わってきます。人間、動物、植物が水に支えられて生きていられています。

ですが、世界中の人が日本の水を使っているわけでもありません。日本の水を世界中の人に使ってもらうため、知ってもらうためにも、私達日本人が、世界中の人の命を救うためにできることはやっていきたいと思

か？
日本の水を世界中へ届けるためには、どのようなことができるでしょうか？

私が見たテレビ番組では、一人の日本人が水不足の方に水を届けました。その瞬間、笑顔になったのです。一人の日本人のおかげもあり、水の力を感じるほど、水を必要としている人も多くいるということが分かりました。水不足で命に関わることや、苦しんでいる人を減らしていくために、水を多くの人に届けたいと思いました。多くの人に水を届けるためにも、この日本人のような行動をとることを大事だと感じ、私は水の大切さを強く感じるようになりました。

今できることは、水を大切に使うことだと思います。限りある水をどのように使うかで世界中の人の生活も変わることがあるかもしれません。時には、水によって被害が起こることもあります。困難になっても、水への感謝の気持ちを持って生活していきます。

一人一人が水を正しく使うことを意識し、これからの生活でも、大切に使っていきます。水と関わっている日々は、恵まれています。私達日本人は、水と共に生きて生活していきます。

【環境生活部長賞】

街を育む水の流れ

仙台市立第一中学校
三年 三浦 颯

私の住む街、仙台。伊達政宗が居を構えた青葉山から城下を見下ろせば、豊かな自然に囲まれた人々の営みが広がっています。どこまでも澄んだ広瀬川。青々と茂る木々。高層ビルが立ち並ぶ中心部。都市と自然が溶け合う「杜の都」の街並みです。とりわけ、定禅寺通や青葉通のケヤキ並木はその象徴であり、地域の誇りです。

けれども、私たちが「杜の都」と呼ぶ街並みの多くは、第二次世界大戦からの復興の過程において造られたものであり、それ以前の「杜の都」の姿は、現在とは大きく異なっているものだったそうです。

「では、その昔、この仙台城からはどのような街並みが見えたのだろう。」疑問に思い調べていくうちに、江戸時代の街づくりにおいて、水がいかに大きな役割を果たしてきたかを知ることができました。そして、私が通う中学校の周辺にも、その痕跡が残っていることを知ったのです。

中学校の西側に、大崎八幡宮という大きな神社があります。その入口には「太鼓橋」と呼ばれる石造りの橋がかかっていますが、橋の下はコンクリートで覆われ、水のせせらぎに耳を傾けることはできません。ところが、このコンクリートの下には、現在もとうとうと水が流れているのです。そして、この流れこそ、仙台の街づくりに欠かすことのできない清らかな水を下流に供給し、「杜の都」の礎となった四ツ谷用水なのです。

四ツ谷用水は、今から約四〇〇年前、伊達政宗の命により着工し、第四代藩主の伊達綱村の時代にはほぼ完成したと考えられています。市の中心部から西へ約四kmの広瀬川上流部に堰を設け、流れを遮る山にはトンネルを掘り、深い谷には木製の樋をかけることにより、城下に豊富な水を供給し

ました。その水は生活用水や産業用水、防火用水など幅広い分野で使われ、仙台の人々の生活を根底から支えています。四ツ谷用水は、いくつかの支流に分かれながら城下を潤し、その総延長は約四四km、あるいは六〇kmに及んだとも言われています。限られた技術をもとに、これだけの水路を整備した先人の苦勞と努力に、私は大きな驚きを覚えました。「太鼓橋」から住宅地を縫うように佇むコンクリートにさえ、当時の人々の喜びが感じられます。

さらに、四ツ谷用水は、仙台藩の人々が目にしたであろう街の姿を形作る上でも重要な役割を果たしていました。流れる水の一部は地下に浸透し、井戸の水位を押し上げることで、飲料水の確保を容易にしました。それだけでなく、城下に広がる屋敷林の成長を促し、緑豊かな街並みの形成に大きく貢献することとなったのです。今は見ることでできない、かつての「杜の都」。そこには、四ツ谷用水の存在が不可欠であり、また四ツ谷用水があったからこそ、いつしか仙台は「杜の都」と呼ばれることになったのだと思います。そして、その水は、今もなお工業用水として宮城県内の多くの企業に利用されています。長い時を超え、暮らしを支え続ける四ツ谷用水に、私は感謝の気持ちで一杯です。

明治時代以降、維持管理が十分に行われなくなったこともあり、下水道の工事とあわせて四ツ谷用水は私たちの目の前から姿を消し、現在は各地に点在する遺構が往年の面影を留めるのみとなっています。一方、人々の間では、仙台の繁栄の礎を忘れてはいけなないとの思いのもと、その価値を見直す動きが広がっています。私も、四ツ谷用水の果たした役割を後世に伝え、地域の宝として受け継いでいくことは、とても大切なことだと思います。一人一人の小さな思いが大きな流れとなり、人と自然が共存する「杜の都」の美しい街並みが永遠に続くことを、私は願っています。

【環境生活部長賞】

旅する水

仙台市立郡山中学校
三年 水沼舞桜

水は旅をする。氷、水、水蒸気と姿を変えながら空と陸や海のあいだを行き来している。大地に雨が降り、川に流れ、海に注ぎ、そして海の水が蒸発して雲ができ、その雲から雨が降る、という循環によって水は様々なところに動く。

一年間の地球の水の動きは、陸地に百一兆トン、海に三百八十五兆トン雨や雪が降り、陸上から七十一兆トン、海から四百二十五兆トンの水が蒸発する。それぞれの合計は四百九十六兆トンとなり、等しくなる。つまり、地球全体にある水の量は変わらないのだ。

では、循環するために必要な期間はどうなのだろうか。川は循環速度が速く、平均二週間程で水が入れ替わる。しかし、湖のように溜まっている水が多くても出入りする水が少ない場合は数ヶ月かかり、海では平均して二、三千年を要する。比較的水の滞留時間の短い川では汚れに気づきやすく、対策をすれば元のようなきれいな状態に戻しやすい。それに対して、湖や海などの水の滞留時間の長い場所では、汚れに気付くのが遅くなり、浄化するには川の場合よりもさらに時間と費用がかかるのだ。日本でも、高度経済成長期には、工場排水がそのまま川や海に流れ込んだことで様々な公害が発生した。今では下水道の整備が進み、水質は改善された。

しかし、世界には日本とは違い、水資源に恵まれていない国も多くある。安全な水が手に入らず、毎日何時間も水くみをする人々、安全ではない水を飲まずには生活していけない人々が九億人近くいる。そのような地域では、幼い子供たちが水くみに一日の大半を費やすため、学校に通うことができないという現実がある。また、毎年百八十万人も幼い命が、安全で

はない水によって消えてしまっている。それに加え、しっかりとしたトイレを使えていない人は世界に二十三億人もいて、これによって飲み水が汚染されているのだ。

「ウォーターフットプリント」という言葉がある。ウォーターフットプリントとは、ひとつの製品をつくるためにどれほどの水が必要としたかを表したもののことだ。たとえば、成育に時間がかかる上、たくさん穀物を餌としている牛は、生産過程で大量の水が必要になる。たった一杯の牛丼をつくるために千八百九十リットルの水が必要なのだ。また、携帯電話を一台製造するにも九百二十リットルの水が使用されている。つまり、私たちの知らない、目に見えていないところでたくさん水が様々なことに使われているのだ。

ならば、水資源に恵まれた日本だからこそできることはないのか。全国民が水資源に恵まれない国々に出向き、水路や井戸の整備を行うことは難しい。だからこそ、支援に向いている団体へ寄付をする、ウォーターフットプリントを考え今までもよりも水資源に恵まれていることに感謝し、食べ物や製品を大切に作る、節水を心がけるなど、今からでもできることがたくさんある。より多くの人が、間接的にでも世界の水の問題に関わることで、少しでも早く世界中で安全な水が使えるようになると私は思う。安全な水が世界中を旅することができるように、私も少しずつ水について知り、そのとき自分ができることをしていきたい。

《第42回「全日本中学生水の作文コンクール」募集概要》

1 作文のメインテーマ

「水について考える」（題名は自由）

2 応募資格

令和2年度に在学中の中学生

3 原稿

400字詰原稿用紙4枚以内で、日本語により表記された個人作品に限ります。

4 応募締切日

令和2年5月8日（金）必着

【※新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、県下中学校が臨時休業となったことを踏まえ、7月3日（金）まで延期】

5 応募方法

作文には、本文の前（原稿用紙枠内）に①題名、②学校名（ふりがな）、③学年、④氏名（ふりがな）を記入し、次の送付先に示す宛先に送付してください。

6 問合せ・送付先

〒980-8570 仙台市青葉区本町三丁目8番1号

宮城県環境生活部 環境対策課 環境影響評価班 あて

問合せ先 電話：022-211-2667（直通）

Eメール：kantaie@pref.miyagi.lg.jp

7 審査

応募作品の中から、県の地方審査会（県予選）で内容が優秀と認められる作品10編以内を選考し表彰します。また、これらの中から特に優秀と認められる作品5編以内を選考し、国土交通省の中央審査会（全国大会）に推薦します。

なお、選考に当たっては、次の観点から審査します。

- ・抽象的あるいは観念的なものでなく、日常の生活や学習、地域における水とのかかわり等を通じて得たことが、具体的に盛り込まれていること。
- ・「テーマ」が的確に設定されており、水の貴重さや水資源開発の重要性、水環境の大切さ等が、中学生らしい視点で記述されていること。
- ・将来の夢や希望、提案等が盛り込まれていること。

8 賞及び賞品

(1) 地方審査会（県予選）

- ・優秀賞（知事賞） 3編以内：賞状、副賞
- ・入選 3編以内：賞状、副賞
- ・佳作 4編程度：賞状、副賞

(2) 中央審査会（全国大会）

- ・最優秀賞（内閣総理大臣賞） 1編：賞状，副賞
- ・優秀賞 9編程度：賞状，副賞
- ・入選 30編程度：賞状，副賞
- ・佳作 100編程度：記念品
- ・一日事務所長体験（最優秀賞及び優秀賞受賞者のうち，希望者）

9 入賞発表

(1) 地方審査会（宮城県予選）

6月中旬に在籍する中学校を通じて御連絡します。

【※応募締切の延期に伴い，9月下旬の連絡】

(2) 中央審査会（全国大会）

7月中旬に在籍する中学校を通じて御連絡します。

【※応募締切の延期に伴い，9月下旬の連絡】

※入賞作文については，作文のほか，記載された学校名・学年・氏名を国土交通省及び宮城県のホームページや作品集に掲載するほか，報道機関を含めた関係者へも提供することとなりますので，予め御承諾の上，御応募下さい。

10 著作権等

- ・応募作品は自作の未発表のものに限ります。
- ・入賞作品の使用権は，主催者に帰属します。
- ・応募作品の返却は行いません。

11 個人情報の取扱い

本コンクールの応募作品に記載の個人情報は，本コンクールの運営に必要な範囲内で利用します。応募者の同意なく，利用目的を超えて転用することはありません。

12 その他

下記ホームページに募集案内を掲載していますので，御参照願います。

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>

「全日本中学生水の作文コンクール」中央審査会における本県のこれまでの入賞者

年度	賞	中学校名	学年	氏名	作品名
第1回 (S54)	国土庁水資源局長賞	仙台市立五橋中学校	3	阿部 克也	大切な水を考える
第2回 (S55)	入選	石巻市立住吉中学校	3	池田真希子	水は生命の泉
第5回 (S58)	入選	仙台市立八木山中学校	3	渡辺 保之	循環の運命をにぎるもの
第6回 (S59)	国土庁水資源局長賞	仙台市立八木山中学校	3	中村 起也	すばらしい贈り物
第10回 (S63)	入選	七が宿町立関中学校	2	村上 真希	一滴の水の中に
第11回 (H元年)	入選	仙台市立八軒中学校	2	杉測 幹樹	潤いをもたらすもの
第12回 (H2)	入選	河南町立河南西中学校	3	遠藤 久美	水と私たち
第13回 (H3)	入選	仙台市立第一中学校	3	石川あかね	山上清水を守ろう
第15回 (H5)	国土交通大臣賞	白石市立小原中学校	1	斉藤 学	水のありがたさ
第16回 (H6)	国土庁20周年記念特別賞	仙台市立第一中学校	3	佐藤 愛	大地からのプレゼント
第17回 (H7)	入選	仙台市立第一中学校	1	渋谷 智子	水はみんなの友達
	入選	宮崎町立宮崎中学校	3	庄子 まり	水に命をかける人
第18回 (H8)	入選	仙台市立第一中学校	2	渋谷 智子	四谷用水にまなぶ
第19回 (H9)	入選	仙台市立第一中学校	3	渋谷 智子	水と共に生きる
第20回 (H10)	入選	本吉町立津谷中学校	2	三浦 大樹	貴重な資源の水
第21回 (H11)	入選	気仙沼市立松岩中学校	3	佐々木恵美	私たちが守る美しい水
第22回 (H12)	入選	仙台市立七郷中学校	3	木村可奈子	水とともに生きる
第25回 (H15)	入選	石巻市立稲井中学校	3	鈴木 舞	水が大好きな祖母
第26回 (H16)	入選	鳴子町立鬼首中学校	3	遠藤 愛子	水との絆
第30回 (H20)	入選	石巻市立石巻中学校	3	杉山 智香	水と共に生きる
第33回 (H23)	国土交通大臣賞	石巻市立石巻中学校	3	西牧 奏	水のある風景がなくなって
第34回 (H24)	入選	石巻市立河南西中学校	3	阿部 美樹	初めて気付いた“水とは何か”
第36回 (H26)	入選	石巻市立稲井中学校	2	勝然みなみ	少しの意識で変わる未来
第37回 (H27)	入選	登米市立中田中学校	3	渡邊ちなみ	「意識」を変えろ
第38回 (H28)	入選	石巻市立河南西中学校	3	土田 琴未	「水」への感謝
第39回 (H29)	入選	女川町立女川中学校	3	阿部 陽菜	感動を後世へと伝える
	入選	大崎市立古川西中学校	3	福原 史乃	未来への課題
第40回 (H30)	内閣総理大臣賞	宮城県仙台二華中学校	3	井崎 英里	時をこえて～未来へ～
第42回 (R2)	入選	仙台市立郡山中学校	3	大柿 楽々	水を守る～野蒜の地から学んだこと～
	入選	宮城県仙台二華中学校	3	西原 結花	水と共に生きる

令和2年11月発行

宮城県 環境生活部 環境対策課

〒980-8570 仙台市青葉区本町三丁目8-1
TEL 022 (211) 2667

